

2020年は子年です。「子」を分解すると「了(おわり)」と「一(はじめ)」となり、終わりと始まりが重なるという意味のようです。終わりと始まりが重なる2020年子年は中長期で成果を期待する投資家にとって、新たな投資を準備する年になると思います。

●バブル終焉期と似通っている

私は、日本株相場は2018年1月に高値を付けたと考えています。その後、2018年10月、そして現在と2度高値圏に戻ってきました。専門家の中には「来年は更に高くなる」と強気な見方がありますが、私は高値圏に戻ってきたのを機に利益確定を行い、今後の下落場面を経過して割安に投資できるチャンスに備えることをお勧めします。

私が、高値圏と思われるこの時期に、売却等で投資準備資金を捻出しておいたほうがよいと考えるのは、バブル時代終焉に向かった時と現在の、資金の流れが似通っていると考えるからです。

バブル期を振り返ると、87年に起こったブラックマンデーで世界同時株安となった後の88年以降、2万514円まで値下がりした日経平均株価は89年末には3万8957円まで急騰し、当時市場は、今後3倍の12万円を目指すなどと浮かれていました。

しかし、90年初頭から株価は急落し、結果、89年末が史上最高値となりました。その後もバブル景気は続き、株式投資に見切りを付けた資金は不動産投資へ向かいました。都内の新築マンションは「億ション」と言われ、一般庶民には高嶺の花。不動産を諦めた人の資金は何百万円もする高級車やブランド商品に向かい、「プチ贅沢」が盛り上がりました。

しかし、90年3月から始まった「不動産融資総量規制」が徐々に不動産価格の頭を抑え、92年中頃にはバブルははじけて、瞬く間に不良債権を多く抱えてしまった金融機関の破綻が懸念される不景気にどっぷりと浸かりました。

現在の投資環境と通じるものがあるように思えます。水準こそ高値圏にありますが、株式相場への参加者は減り、不動産、そして最近では新車販売の売れ行きにも翳りが見えてきました。

ただし現在は、メガバンクでさえ破綻が心配された当時ほど金融機関の体力は落ちておらず、著しく低い金利水準でもあるため、前回のバブル崩壊時と比べて価値の下落幅の大きさも期間の長さも小規模になると想定され、今後の下落場面は割安に投資できるチャンスと考えられます。

しかし、高値圏ではさらに高くなる機会があるように思えて売却する

決断ができず、逆に、大きく下落して安値圏になっても、値上がりしない局面がしばらく続くと、まだ値下がりするように思えて投資の決断ができません。

●高値圏、安値圏での役に立つ格言

そんな方々へ、相場格言を贈りたいと思います。相場格言は、「あの時、こうしておけば良かった」という投資の失敗、後悔から生まれた知恵なので参考になります。

まず、高値圏で役に立つ相場格言。「天井売れず、底買えず」「魚の頭としっぽはくれてやれ」(そもそも高値では売れないし、安値では買えないもの。高値圏で売ることができれば儲けもの)。「買いの迷いは見送り、売りの迷いは即刻売れ」「相場は高値圏では強く見える」(高値で売り損なうと、もう少し高いところで売りたいと躊躇してしまうが、高値圏では買いをためらったら見送ること。売りを迷ったら即刻売ることができれば大きな損を避けることができる)。そして、「万人までも強気なら阿呆になって売りの種を撒け」(もったいないと言われても利益確定をためらってはいけない)。

次に安値圏でチャンスをつかむ相場格言。「エコノミストは理路整然と間違える」(専門家が「だから下がる」と言い切るようになったら相場は底値に近い)。「高値から半値八掛け2割引(=1×0.5×0.8×0.8=0.32)で底を打つ」(大きく値下がりするとどこまでも値下がりしていく気分になるが高値から3分1になったら底値の目安とする)。

肝心なのは、「皆一面弱気なら阿呆になって買うべし」。その時に資金が必要なので高値圏の時から投資できるように準備することが大事です。

